

(少しの勇氣) 大きな経験

～スタディーツアーに参加して～ 文&写真 学生記者 高瀬杏菜 (法学部1年)

あのとき、2度のためらいが忘れかけていたものを思い出させてくれた。

新入生対象ガイダンスがひと通り終わり、これから何をしようかと迷っていた4月のある日。中大ホームページで気になるものを見つけた。「宮城県女川町、被災地スタディーツアー」。よくよく読んでみると、「震災ボランティアをしたいが、自分に何が出来るか分からない」「ボランティアはハードルが高い」と思っている学生(新入生優先)を対象に、中大ボランティアステーションがツアー参加を呼びかけていた。

機会があればボランティア活動をしたかった。①以前に活動経験があり、大学生になってもできる範囲で続けたい②被災地でメディア報道の現状と地元の方々の暮らしぶりや心情を自分の目と耳で見聞したかった。

応募用紙を受け取り、帰宅してエントリーシート(ES)作成に取り掛かった。2日後には清書も終えた。

提出できる状態になったときだった。鞆にESを入れて大学へ。電車内でふと思った。「被災地って、ちょっと怖いかも…。ニュースで見た津波発生直後の映像が頭をよぎったのだ。画面ですらあれほど怖がっていたのに、実際に現実と向き合うことができるのだろうか。弱気な自分がいた。

行ってみたい気持ちより、初めての経験に対する恐れのほうが大きくなっていった。この日ESに手を触れることはなかった。

それでも、あきらめたわけではなかつ

た。母に相談した。「被災地スタディーツアーっていうのがあるのだけど、どう思うよ。でも、行くか行かないかは自分で決めなさい」。丸1日ほど迷ったすえ翌日には、ESを書いたわけだし、出してみよう、と思う自分がいた。数日経って結果発表を見たとき、もう迷いはなかった。



被災地スタディーツアーは5月24日から26日の2泊3日で行われた。出発前には2度の事前研修が組まれた。

女川町きぼうのかね商店街にある「アートギルド」の崎村さんはこう話した。「テレビなどで忘れない3・11とよく言っていますが、それは何を忘れないと言っているのでしょうか」

私は戸惑った。スポーツ観戦で「WASURENAI 3・11」とプリントされたユニホームを見ていたが、そこまで気にしていなくて、崎村さんの問いかけに答えることができなかった。

崎村さんは続ける。「忘れないとは津波を単なる記録として残すということでしょうか。そうではなくて震災を教訓にし

てほしい。津波が来たらすぐに逃げるといふ教訓に…」

震災はいつでもどこで起こるか分からない。いまこの瞬間に起こる可能性も否定できない。だからこそ、私たちはその教訓を忘れないようにしよう。

商店街で地元の女子高生に質問する機会を得た。思い切って彼女に聞いてみた。「メディアが取材することをどう思いますか」。正直なところ、震災直後にカメラなどで撮影している人たちを見ると、いい気持ちはしませんでした。しばらく経って、今回の震災のことを風化させないためにも、記録を残していかなければならないと思いました」

事前研修の1コマを思い出した。ツアーのコーディネーターであり、引率者でもある松本さんの言葉だ。「現地に行ったら、頭の中で記憶するだけではなく、メモや写真などの記録を残してください」

確かに、記憶は風化する。しかし、この経験を風化させてはならない。そのためにメディアが活躍することを期待する。

その後、私まで記事を書く立場になるとは思ってもみなかった。被災地スタディーツアーをきっかけに、興味あることに挑戦しようという気持ちになった。失敗を恐れ、いつの日からか埋もれてしまったが、かつて挑戦は私の長所といわれていた。

あのとき、少しの勇氣から被災地の現状を知り、被災地への気持ちが芽生えた。いまその気持ちは大きくなっていく。